

風土



冬すみれ

神蔵器

鎌倉に大雪のあり実朝忌

火の色は泪のいろぞ龍の玉

冬すみれ日本武尊かな

まんさくや太陽割つて八咫鳥

立春や余震のわたる青畳

豆打つや團十郎の飛び六方
どんど火の大きな闇を海の引く
鷹舞へり天上無垢の石廊崎
新雪に顔おしてわがデスマスク
暮方の庭にばらまく寒すずめ
臘梅や桂郎呉夫墓ならび
明慶の文珠菩薩や寒の明く



竹間集

同人作品



いやながながと

南 うみを

煉瓦倉庫楷書の如く並び冬
きゆつきゆつと鳴く白菜を塩もみす
舞ひ終へて月に冷めゆく神楽獅子
総代は わが畑の地主の翁並く 小道具係里神楽
大根を干し残したる葬かな
落葉踏み還るといふはよかりける
本山のいやながながと煤の竹

生姜酒

島谷 征良

金網よりひよいとアメリカセンダンゲサ
大寺の奥の暗さよ火の恋し
蟻子とんで立冬の日のまぶしさよ
数珠玉も赤のまんまも小春の日
冬うらら見晴台に赤とんぼ
酉の市空はまばらに星を撒き
生姜酒胸より酔ひてきたりけり

お講風

大竹 淑子

お講風河岸におほきな魚籠伏せて
冬霧の近つあふみへ舟出して
谿底に細き流れや神迎
日照雨とも時雨とも濡れ見性寺
冬紅葉遊女の墓も見性寺
分流は魚道や寒の水奔り
叡山の麓に数寄屋冬の鵲

冬 薔 薇

宮川みね子

大綿のただよふ暮色鍵をさす
嵯峨菊の括られしまま雨となる
紅葉かつ散る青空も色変へず
冬の日や暮れきはの鯉むらさきに
思ひ出のまぶしさのこる冬青空
マリヤカラス一輪を剪る冬薔薇
流るるとなく水流れ冬至かな

木菟のこゑ

浜 福恵

臘八や日へ滑り出す鴨の陣
潮平ら漢がひとり牡蠣を打つ
雀らや雪の晴れ間を海へ来て
すれちがふマントの人や煉瓦館
枯芝にふはりと残る日のぬくみ
丹後和紙守る一燈や冬霧らふ
元伊勢に式部歌塚木菟のこゑ

冬 の 日

山田 暢子

枯野ゆくSL列車に指定席
火の匂ひ土の匂ひの里神楽
詫び言を聴く外套を脱ぎながら
冬座敷暗きところに喪服掛け
数へ日の予定に夫の爪を切る
三代で使ふ播粉木年詰まる
木枯や人住むところ燈の洩るる

古 日 記

門伝 史会

枯野行く三塔めぐり斑鳩に
法隆寺 南一丁目 冬桜
法隆寺門前に吹く奈良茶粥
河豚ひれ干す竜馬通りの割烹店
裏梯子軋ませ降りる寒さかな
寺田屋の風呂場の鏡石露の花
鮮明に旅の思ひ出古日記

一年八か月後の仙台荒浜

山路 紀子

町一つ枯野となれり津波あと
廃車の山廃材の山冬ざる
山眠る忽と消えたる八百戸
たんぽぽの瓦礫の山に返り咲く
ダンブカーばかり行き交ふ大枯野
潮荒れの冬田の土を入れ替ふる
残さるる庭石ひとつ日向ぼこ
冬鴉や榛の梢に布吹かれ
根こそぎの松累々と冬の浜
高く低く冬の鷗の挽歌かな

山河集

同人作品



神蔵器選

暗がりを水流れをり酉の市

間島あきら

神君の戒名十六文字冴ゆる
来迎の雲のむらさき冬芽立つ

かつかつと囁うつ音も冬に人る
「残夢月」の句碑に火点す烏瓜

千日回峰苦行の寺の冬桜

奥田 茶々

繋がれし十石舟に雲かな
水美味き伏見の冬のざる豆腐

兎ちやんの耳だけ残す冬林檎
生牡蠣の皿にミニチュア鳥居立つ

如意棒のごとくに葱を鷲掴み

石崎 浄

結跏趺坐もがり笛吹く火灯窓
警策に雪の香立てり禅御堂

寒餅をかるた散らしに干し広げ
雪の墓地踏み沈む身を傾けて

一灯の下の文机冬至かな

下山田美江

捨て鐘の京のひと打や冬の蝶

魯田や泥落とし池に繩束子
白息や「円覚仏堂」てふ頭陀袋

不器用な身を木枯に曝しけり

上村 萼子

ベランダの景色となりし大根干し
漱石忌ボンボン時計の電池替へ

十二月朝から夫は第九聴く
たんねんにつまみし毛玉冬日向

◇特別作品◇(抄)

初電車

須藤美智子

初電車子の住む町の浅草へ
子の家の平穩祈る初詣
一夜明け鐘撞堂や今朝の春
身をすすぐ竜吐水なる寒の水
浅草に地下鉄多し初参り
雷神の臍の辺りに冬日射す
晴着きて仲見世に買ふ切山椒
初寄席のほろ酔客も居たりけり
初春の角を曲れば神谷バー
人日や人形焼に仁王様

風土独語／神蔵 器



暗がりを水流れをり西の市

間島あきら

さて、掲出句の「暗がりを水流れをり」は実景であろうか。西の市も全国所々にあつて、地方の比較的小さな神社の西の市などは、秋の刈り取りもすっかり終わつた後の寒々とした田園風景が広がり、暗闇の中に一条の川の流れがあることも在り得るだろう。

しかし、この句は小さな西の市ではなく、出来るだけ大都会の伝統もあり盛んな大きな西の市、私だったら、やはり浅草の大鷲神社の西の市である。少し離れているけれど、うつつつけの隅田川も流れている。

西の市は勿論ご存知の鷲をまつる祭礼で開運・商売繁盛の神として親しまれている。縁起ものの代表的なものに熊手があるが、表にはおかめの面、大判・小判、七福神、榎、宝船などいっっぱいに飾られている。それに比して裏には、熊の手になつた竹の力半があるだけで、飾り物は何一つない。

作者は西の市の明るく賑やかで活気にあふれた表舞台から、夢幻の後場のごとく一転して、後の闇が暗く流れる川の水の流れ

に見えて来る。これが地方の小さな西の市の現実であつたら、また別の風情があり、ひとしお哀れ深いであろう。

しかし、もしこの句の「暗がりの水の流れ」が作者の幻想や想像上のものであれば、この暗い流れはこの世の裏側、人の一生の暗さより見えてこない。しかし、目を閉じていると、この沈黙の中に、祈りと救済、あたたかさが感じられる。

寒餅をかるた散らしに干し広げ

石崎 浄

寒餅は水餅にしたり、藁縄の縫りの間に切餅を挟み入れて、軒や木の枝に吊るして干し上げる。もつとも一般的な方法としては藁むしろか藁ござなどに並べて干し上げる。

掲出句は「かるた散らしに」とあるので、切餅は整然と並べられているのではなく、ばらばらに散らしているのであろう。家族・身内・ごく親しい友人たち…。

作者、浄さんは、切餅を飯台から、藁ござの上に出して、両掌で撫ぜるように藁ござの上に平らに広げていった。ふと掌が止まり、「あら、いやだアー」

浄さんの手が、かるたを撒き散らす時のような手つきで動いていたのだ。もう何年も、何十年もかるた取りをしていないのに…。

なお、これは小林輝子さんから聞いた話だが、切餅を干す直前に、約三時間ぐらい一旦水に漬けてから干すのがコツとのことであつた。(以下略)

風土集



神蔵器選

夫の墓見ゆる北窓塞がざる 相模原

天野みゆき

纏足の女人をおもふ寒牡丹

一と揺れの夢の世なりし冬銀河

枯ると言ひ老ゆとは言はじ筆はじめ

大寒やオリオン既に位置正す

寒風のいつもの乗車位置に立つ 高槻

浅田 光代

クリスマスケーキ子へ水平に手渡しぬ

太葱を刻みぬて世を遠くせり

息白くすれ違ひたる八瀬童子

叡山の尖りきつたる十二月

文法を妻に問はるる冬菜畑 津山 生田 作

日の渡る谿に声ある冬至かな

冬霧に湿る野良衣のまま通す

緩急の櫂落葉や日の温み

鳥の群去つて大藪冬の貌

蕉翁の面影塚に冬の蝶 東京 林 いづみ

香煙の行方枯菊焚く行方

冬あたたか供花のとぎれず届くなり

めつむれば批のいませり冬銀河

風呂吹や思ひの先に金福寺 舞鶴

御先祖を長押に掲げ年守る 山本 町子

盆点前古弟子交互に年納め

豊漁てふ鱒三味の恵みかな

歳晩の絆創膏洩る手指の血

角笛や雪のヒュッテに吹きて買ふ

急かされてひと日短き十二月 千葉 上村 葉子

ウインドーに映る猫背や漱石忌

夜半の雨あがり凍星ふたつ三つ

冬夕焼富士全容を際立たせ

数へ日や忘るることも生きること